

2023 文化で滋賀を元気に!賞



大賞 小原かご 山と生きる暮らしを伝える文化賞

太々野功さん、荒井恵梨子さん／長浜市

(受賞者・団体／主な活動地域 以下同じ)

【講評】

いま日本では、さまざまな伝統工法、技術・技能の継承が途切れようとしている。自然素材による編みかごは、プラスチック容器や石油由来のバッグなどにとってかわり、需要の消失とともに技術・技能が廃れることは想像に難しくない。さらに残念なことに地域固有の文化伝統は、人口減少により特別な情熱と行動がないと伝承できなくなっている。

今回の小原かごが作られていた地域は、丹生ダムの建設予定地となり、住民が各地に離村し、村自体がなくなるというケースである。そのなかで、ただ一人の作り手となった太々野さんが、離村後も小原かごを伝承するために尽力され、次の世代から受け継ぐ人材が現れることにつながったことが、注目するところである。

伝統のものづくりには、方法を記録して伝えられる技術は伝達できても、技能など人から人でないと伝えられないものがある。小原かごを通じて、かつての山の暮らしで大切にされていた価値観や文化を伝える太々野さん。そして、それを受け継ぐ荒井さんは研究者としての自らのバックグラウンドを活かしつつ、太々野さんとの対話を通じて、かごのデザインを考案したり、書籍を出版するなど次の世代に伝える工夫を加え、伝承活動の幅を広げている。太々野さんと荒井さんの活動は、人口減少時代の地域文化の継承の在り方への重要な提案であり、広く紹介したい事例として賞を贈りたい。

受賞者について

小原かごは、長浜市余呉町の北部、丹生ダム建設予定地となり廃村となった小原集落で受け継がれてきた民具で、イタヤカエダなどの若木の幹から作る全国でも希少な木かごである。生活様式の変化とともに作り手がなくなる中、太々野さんはただ一人の作り手として長年、小原かごの伝承に尽力されてきた。「小原かごを復活させる会」の講師として小原かご教室を開催し、100人を超える人にかごづくりを指導。2011年には公益社団法人国土緑化推進機構の「森の能手・名人」に認定される。

荒井恵梨子さんは縁あって5年前に長浜市木之本町に移住し、小原かごと太々野さんに出会う。大学院で文化資源学を専攻し、地域文化の継承を研究していたことから、小原かごに興味を持ち、太々野さんに弟子入り。山に入って木を切り、材料作りからかご編みまでの全工程を修得し、太々野さんの伝承活動を継承している。2022年には小原かご研究会を立ち上げ、体験教室や展覧会を開催。2023年5月には書籍「自然と神々と暮らした人びとの民具 小原かご」(能美舎)を出版し、小原かごは一般に知られることとなった。本書には、太々野さんが小原かごの伝承を通して常に語ってきた小原村の自然とともに暮らした人々の知恵と文化、風景の記憶も含めて書かれている。かごの作り方は次の世代に教えられても、小原村を知らない自分たちに小原かごの文化を伝えることはできないと考え、太々野さんから聞き取り、記録として残すことにした。次は、専門資料として小原かごの教科書を出版する。課題は、多くの伝統工芸品が直面している原材料の確保である。手入れがされていない山が多くなり、かごの材料となる木の採取が難しくなっていることから、小原かご研究会などで、木の育成と植栽に取り組んでいく計画である。

表彰概要

- 表彰の種類 (1)各賞 文化で滋賀を明るく元気にし、活力あふれる地域社会の実現に貢献している団体または個人(若干名)
(2)大賞 (1)の受賞候補のうち最も評価された団体または個人(1名)
(3)各賞の名称は、推薦者からの提案に基づき決定
- 表彰式 令和6年2月17日(土) びわ湖ホール小ホール ※受賞者には賞状と賞金(大賞10万円、各賞5万円)を贈呈。
- 募集期間 令和5年8月1日(火)～10月31日(火)
- 候補者 募集期間内に推薦書を文化・経済フォーラム滋賀に提出。自薦、他薦は問わない。
- 選考 令和5年12月14日(木) 選考委員会で審査を行い、大賞・各賞を選考。
選考委員 秋村 洋〔㈱ブラネットリビング代表取締役〕、高梨 純次〔(公財)秀明文化財団理事〕、西堀 武〔㈱しがぎん経済文化センター取締役社長〕、南 千勢子〔ピアニスト〕、山本 勝義〔㈱ビルディング・コンサルタントワイス代表取締役〕

子どもたちが生み出す国際交流文化賞

瀬田東国際交流クラブ
代表 津島佳絵子さん／大津市



外国にルーツを持つ人や国際交流に関心がある人たちが集う「瀬田東国際交流クラブ」。子どもたちも積極的に地域社会の中で多様な文化に馴染もうと行動することは大変有意義である。心が通い合う温かい取り組みだと注目したい。

同クラブは大津市立瀬田東幼稚園に通う園児の保護者ら約30人が子育て支援サークルとして2015年に発足。子どもたちの卒園に伴い、継続した会として地域の誰もが参加できるクラブにと、2020年幼稚園から独立し、ふれあいセンターなどで活動の幅を広げている。日本語の苦手な人にはごみの出し方や漢字の勉強会など日々の暮らしに寄り添ううち、国籍を超えた様々な人が集まる地域に根付いたクラブに成長した。

コロナ禍では「一番交流を必要とする時に何ができるか」と、子ども自身もスイカ割りや生け花体験などを企画、参加した。保護者が講師役になったモンゴル人やペルー人によるお料理会では、日本語が得意な子どもたちが通訳を務めるなど、国籍を超えた

「子どもの力」で大人も継続的な活動を続けることができたという。「国際交流と言わずとも自然に国籍を超えて交流できる場にすることがこのクラブの役割だ」と、代表の津島佳絵子さんは次世代の力に期待する。

近年、グローバル時代の人材として外国人労働者や外国人留学生を受け入れる制度の整備が進み、地域でも外国籍の人が非常に身近になってきた。これからは、多様な文化を認め、異なる文化を互いに理解し合うようなコミュニケーションの場を作る活動がより求められていくであろう。他国の文化を学び、受け入れることで、自分たちの文化を知ることができることを押さえておきたい。活動の主役が子どもたちであることも、本クラブが評価される場所である。

かるたで滋賀大好き子を育てる文化賞

滋賀コレかるたで地域活性プロジェクト
代表 松井栄里さん／草津市



「滋賀コレかるたで地域活性プロジェクト」は子どもたちに遊びながら故郷を愛する心を育ててもらいたいと滋賀の名所、歴史、文化を盛り込んだかるたを県内の幼稚園などに通う子どもたちに無償で贈っている。地元愛を醸成するこの取り組みがますます盛んとなることを望みたい。

趣旨に賛同した企業や団体からの寄付で、かるたの制作費用を賄う仕組みだ。これまで県内の24団体が協賛。2022年から、同プロジェクトのメンバーが県内62か所の保育園や幼稚園、福祉施設などに赴き、約2000人の子どもたちにかかるたをプレゼントした。配布されたかるたにはスポンサーになった企業の会社内容を取り込んだ「オンリーワン札」も1枚プラスされている。生まれ育った滋賀のことを深く知り、近くにある会社や工場、仕事に励む大人たちをもっと身近に感じられれば、もし地元を離れても故郷に誇りを持ち

続けてもらえるはず、との願いが込められている。

「文字を覚えるだけでなく、かるたが取れない悔しさ、取れた時の達成感、他人に譲る優しい心など、かるた遊びは子どもたちを育てます」と、松井栄里さんは説明する。

大人にとっても札を読み、子どもたちに解説することで、故郷を振り返る良い機会にもなる。このかるたを使つての「家族でかるた」という、懐かしくも温かい光景が広がることが期待でき、滋賀への愛も深まることが確信できる取り組みだ。同じ地域で生活している住民と企業が繋がり、より関係を深める好機を生み出し、さらに発展する可能性も。子どもたちの文字教育、地域コミュニケーション、地元企業の事業内容の発信。まさに三方よしであり、文化と経済の交流・活性化が実行されている素晴らしい取り組みだと高く評価したい。

よし笛で人々と水辺を元気に!文化賞

日本よし笛協会
会長 近藤ゆみ子さん／近江八幡市



琵琶湖のヨシ群落は滋賀の風景画や風景写真を代表する一場面だ。音・音楽でヨシを表現し、琵琶湖の魅力を伝えるのが「日本よし笛協会」だ。滋賀の風景を構成するヨシ、その魅力を発信することは環境保全への課題提起。さらには地域観光産業への価値向上にも寄与している。

よし笛誕生のきっかけは「日本よし笛協会」前会長の菊井了さん(故人)が琵琶湖や琵琶湖を取り巻く環境にもっと多くの人に目を向けてもらえないかと水質浄化作用を持つヨシに着目。これまでのヨシを使った草笛とは違い、菊井さんは竹のマウスピースを使うなど工夫を重ねながら、2オクターブ弱の音域にきちんと音階を持つ約25センチの楽器として完成させた。

2006年、地域に根ざした演奏を目指し、「日本よし笛協会」を設立。今では、県内外や海外の30サークル、約300人も人が加盟する協会に発展した。県内で開かれる環境保全をテーマにした地域のフォーラムや事業、学校などでの演奏、ヨシ学習などの郷土学習、次世代の講師やよし笛製作者の育成にも情熱を注ぎ、着実な活動を積み重ねている点も高く評価したい。

「よし笛の音色に乗せ、これからも時を超えてヨシ原の大切さや琵琶湖を取り巻く環境への理解を次世代の人たちにも届けたい」と、会長の近藤ゆみ子さん。

ヨシ原の育成を通じて環境問題にも目を向け、自然との共生やSDGsにつながる活動は、「文化で滋賀を元気に!賞」に合致している。よし笛の音色をきっかけにヨシの水質浄化作用、そのヨシを育てる琵琶湖の現状などにも関心を抱いていただくことができれば、文化と環境という新しいコラボレーションが多面に良い影響を及ぼすことと、大いに期待したい。